

シリーズ 戦後70年

# 語り継ぐ「記録と記憶」

## 第2回 忘れざる、5月29日

70年前のきょう5月29日、米軍による無差別爆撃が横浜市中心地域に対して行われ、およそ8千〜1万人が亡くなった。市内東原在住の井上精司さん(76)は暮らしていた神奈川区で「横浜大空襲」に遭い、辛くも生き延びた。「一生忘れることができない」という5月29日。戦争の記憶と平和への想いを取材した。

井上さんは当時、国民学校に入学したての6歳。実家は、攻撃目標の1つだった東神奈川駅から徒歩5分ほどの場所であり、両親と2歳の弟、鶴見区から避難していた叔母と従兄、6人で生活していた。兄と姉は集団疎開していた。

29日の早朝、ラジオから米の爆撃機が関東南部から接近しているという情報が

流れた。「いつもと違う不安」と緊張感を覚えました。空襲を告げるサイレンが鳴ったのは、小学校に向かう途中だった。急いで家に戻ると、裏で大きな炸裂音が響いた。隣家に爆弾が命中した音だった。「逃げる」。従兄と一緒に、火の海から逃げるように海沿いへ避難した。その途中で見た光景は、今も



空襲の資料をもとに、淡々と語る井上さん



桜木町駅上空から撮影した、大空襲直後の横浜市街。※「写真でみる横浜大空襲」Web版より抜粋

### 悲惨な体験、後世へ

忘れられない。道から道へと火が飛び移り、川には焼死体が積み重なっていた。火災がおさまった後は、見渡す限りの焼野原。コンクリート製の小学校や保健所が、ぼつぼつと点在するのみだった。離れ離れになった家族は

避難先の農家で迎えた終戦。「夜間空襲から逃れるために電気を消さなくても良い」、「ぐっすり眠ることが出来る」。安堵の想いが胸を占めた。

「戦争の悲惨さは、体験した人にしか分かりません。戦後70年が経ち、記憶を語る人が少なくなっています。二度と悲劇を繰り返さないため、自分の経験や想いを後世に伝えていきたいという。」

勤務していた会社の組織が「私の戦争体験記」あの日、あの頃」と題した冊子を製作した時は、横浜大空襲について寄稿した。所話している。